

【女性性及び母性の基盤とは何か】 (1975)

マーサ・ハリス(Martha Harris)

[※原題;

The early basis of adult female sexuality and motherliness]

ここでまず最初に、お断りしておきたいことがございます。これ迄も「女性性 female sexuality」を論じた秀でた著述家は数多くいらっしゃいまして、この主題を巡って多大なる貢献をなさっておいでなわけです。残念ながら私はここでそうした方々のお名前を挙げるできません。この論文では、私の関心のある事柄に直接的な影響を及ぼした、ごく限られた方々について言及するに留めます。そこで‘性なるもの sexuality’の基盤とされるものが何かを理解するために、まずはフロイトの見解を簡単に纏めてみたいと思います。それからメラニー・クラインの探究から発展してきたもの、そしてウィルフレド・ビオンの業績を通してわれわれが啓発されてきたもの、さらにはエスタ・ビックの「乳幼児発達研究」から派生したところの知見についても述べてまいります。そして最後に、ドナルド・メルツァーが成人と子どもの性的行為ならびにその心的状態において、乳幼児および成人の素因にはどのような相違があるのか、詳細に解説したものがありますので、それらにも言及してまいりましょう。

フロイトについて私が理解したところでは、女性 woman というのは基本的には性器的な劣等感(ペニス羨望 penis envy)に支配されており、思春期までは女性性器というものも意識にのぼらないといった、そうした見解だったように思われます。彼にとっては、女性の性的傾向は受動的 passive であり、マゾヒズムと同類ともいえるものであります。その性的な発達というものを考察しますと、離乳時における失望感ゆえに母親に背を向けた後、再びその母親との同一視へと返り咲く道筋が必要であるため困難を極めるわけであります。彼は、女性性 female sexuality というものが殊更に赤ちゃんへの渴望によって支配されていると見做すことはありませんでした。彼は、女性の愛の能力というものが主に子どもたちへ向けられていると見たわけですが、その男性との関係性については飽くまでも自己愛的かつ依存的と見做しております。一般的に‘性なるもの sexuality’とは快樂原則によって支配されているとの見解を有していたわけですから、自我は満足やら心的苦痛の回避をとおしてホメオスタシス(恒常性)を維持せんとするような解決を志向しているということになりましょう。

メラニー・クラインの見解はどちらかといえばより‘発達の developmental’といえましょう。彼女は、子どもというのは‘認知愛的衝動 the epistemophilic instinct’によって駆り立てられるものであり、そして対象との相互的な働きかけをとおして、投影並びに摂り入れのプロセスによって成長するということを考えました。この場合の対象とは、まずは何よりも母親の身体であり、そしてそのパーソナリティといったことになりましょう。彼女は、乳房と愉しむことのできる関係性に満足的な‘性なるもの sexuality’の源を見たのであります。すなわちペニスとヴァギナの間での愉しめる快感能力とは、その源が乳房と口との

間のプロトタイプな快感に根差しているということになりましょう。‘性なるもの’の発達とは性格形成と不可分かつ密接な関連性を有するものであり、そして成人の性格は、そのパーソナリティの乳幼児的構造とは自ずから相違するものであると考えたのであります。それら性格における‘乳幼児的要因’といいますのは快樂原則によって支配されており、それで現実原則によって、せいぜいのところ教化された利己心 self-interest によって、修正されてゆくといった傾向にあることになりましょう。彼らは嫉妬心、羨望、そして快樂をめぐる競争心に駆り立てられます。どういふことかといいますと、子どもは両親が快樂を自分たちだけでこっそり愉しんでいて、自分にはそれが拒まれている。そのように信じているからであります。

こうした‘乳幼児的要因’は成人になってもその生涯をとおして持続するといえましょう。程度の差はあれ、われわれの誰しもがそうであります。すなわちそれは、彼女が「パラノイド・シゾイド態勢 paranoid-schizoid position」と名づけたところの特徴を有してゐるわけでありまして、そこでは自己中心性 egocentricity 及びナルシズムがより優勢でありまして、良き対象への愛情と感謝に取って換わられてしまうといったわけでありまして、そこで、ドナルド・メルツァーの著書『Sexual States of Mind』の中で Mrs.クラインの業績について論考されている箇所に言及してみることにいたしましょう。彼はこんなふう述べております。成人にとつての‘性なるもの’とは、からだとからだが出会うと同じく、こころもまた互いに出会うということ、そしてそこに何かしら新しいことが創造されるということでありまして、そういうことですから、子どもの‘性なるもの’とは自ずから相違しているということがお分かりいただけます。その場合には主として快樂と満足感が万能感的に唯ひたすら自己のために追求されているわけですから、それが身体的な操作 manipulation に依るか、もしくは空想においてか、それらいずれであっても…。ここからさらには、成人同士の性交にあつても、そこに自慰の意味合いを有すること、もしくは自慰的要素で汚染されるといったこともあり得るものと考えていいでしょう。

もしここで男性及び女性のいずれにおいても、成人の‘性なるもの’というものが‘内なる両親’との同一視を基盤にしていると考えますならば、誰しも人間は両性的 bi-sexual であつて、つまり男性的並びに女性的な方向づけを有していると言えましょう。これについてはおそらく一般的に認められているものと思われまして、そうした同一視がどのような特徴づけを有するかは、子どもの生来の気質ばかりではなく、外界の両親の有する‘クオリティー’によつても大いに左右されるところでしよう。さらには、その乳幼児期において幼子によつて取り込まれたところの外界の両親というのは、彼ら自身もまた内的な対象、つまり彼ら自身の内なる両親を抱えもつところの人々として想定されていいかと思われまして。

さて、‘全体像 whole objects’としての両親との同一視が起こる以前に、乳幼児には‘部分対象 part-object’としての母親との関係性並びに同一視といったことがあります。わが子のからだを受け入れかつ抱えるところの彼女のからだの部分であります。さらには母子双方が出会う点で子どものニーズはどのように理解されたか、その‘クオリティー’であります。ピオンは、メラニー・クラインの投影同一視の理論を用い、この対象とのプライマリーな関係性を概念化し、男性性および女性性の通常のシンボル

(♂♀)を援用し、それを「コンティンド(抱えられたもの)」及び「コンテイナー(抱えるもの)」の関係性を表徴したのであります。すなわち、「投影されたもの」、また「投影を受け入れる対象」ということになりませんが・・。乳幼児はそれ自身が内に抱える何らかの或る部分を投影するのであります。恐怖やら心掻き乱す感覚であります。それがもしも適切なありようでもって受け入れられ、思案もされ、反応してもらうことができれば、子どもによってそれはより改善されたかたちで再び受け入れられることになりましょう。そこには心的苦痛に忍耐でもって関わってくれた対象—理解してくれた対象—の経験も伴なわれるはずであります。もし母親がひどく取り乱した落ち着かない幼子を理解しかつ援助することに悦びを感じるしたら、その子はやがて悦び joyfulness およびレジリエンス resilience の‘クオリティー’をもったところの受容的な対象を取り込むものと考えていいでしょう。いかなる意味でも「愉しむ能力 the capacity of enjoyment」とは、殊に性的な愉しみというものについてですが、物事を面白く深く味わうことができ、理解力も備わった対象を乳幼児期に於いてどれほど摂取し得たか、そこに源があるわけです。勿論のこと、その後の経験もまた、それがどのように進展してゆくかを決定づけるといえましようけれど。

ここでは、母子関係性において相互的な理解が何らかの事情で損なわれ、それがゆえに母子間の経験の‘クオリティー’を受容し、もしくはそれら微妙な差異をも十分に味わったりすることの自在な対象を取り込むことが妨げられているといった実態について僅かながらもお話することといたしましょう。その一方では、あらゆることがらを人生の一部として尊んで、単に面倒を省くといったふうにさっさと片付けてしまおうとするのではなく、快樂のみならず心的苦痛にしても意味あるものと見做すといったことが容易に為し得る対象もあることを心しておくのもよろしいかと考えられます。[こうした母子間の‘相性’に纏わる問題点については既に幾つか Isca Salzberger Wittenberg(1970)によって簡潔にして明快に論述されております。]

取り分けてここでまずは母親について考察してみましよう。そこで全体に十分健全であり、赤ちゃんのためにできるだけのことをしたいと願っている母親といったことを想定いたします。乳幼児観察の経験からして私が強く印象づけられてきましたのは、極めて多くの母親が、初産の場合ですと殆どの母親のどなたもと言っていいぐらいに、精一杯赤ちゃんに寄り添う能力、つまり赤ちゃんのニーズに対して深く受容的であるということ、が不安感やら抑うつ感によって妨げられているといったことがあげられます。これは母親の経験レベルでは次のようなことが起きているともいえましよう。すなわち幾らか躁的に子育てから逃避せんとしているのかも知れませんが、もしくはそれが平坦さ、無気力もしくは無感覚といった類いの表出ということになるやも知れませんが。そうした抑うつ感が母親の‘夢想する力 reverie’ (Bion,1962)、そして関係性の育まれてゆく親密感を損なう程度には極めて多様性があると言えましよう。母親たちは、もしも夫たちがこの‘新米’の母親の傍らに寄り添い、親的となってくれて、手助けを惜まず、要求がましくないとといったふうに支援態勢を固めている場合ですと、大いに助けられましようし、やがて事態を切り抜かれてゆくでしょう。母親はもしかしたら十分にレジリエンスを持ち合わせていて、いずれ出産の外傷体験を咀嚼し、また己自身をサポートしてくれる内的なリソースを見出し、そして立ち直りを図るといったことができるようになるとも言えましよう。それでどうか人心地が付いた頃に

は、気分的にも自由になり、精神的にも情緒的にも、赤ちゃんに対してそれが最も必要とするときに、母親自らを与えられるようになりますでしょう。しかも多くの場合においては、赤ちゃん自身が、一旦ニーズが満たされると、その反応性によってやがて母親を教え導くことができるようになります。すなわち母親自身に、実際のところ自分が母親だということ、幼い女の子がお母さんのふりをしているといったことではもはやないということを赤ちゃんが解らせてあげられるといったことであります。

赤ちゃんは、しかしながら、最早期からして各々その気質には大いに違いがございます。そのニーズを感じて貰うよう訴える能力においても、そのニーズの複雑で強烈な度合いにしても、そして応答能力においてもさまざまなわけです。彼らは、そのように母親に何ごとかを絶えず喚起させんとするにしても、その‘クオリティー’において相違があるわけであります。ですから、たぶんたとえ同じ家族内であったとしても皆どの子も同じ母親を持ったとは言えないとすら申せましょう。乳幼児が己自身の何らかの部分的母亲に対して表出することが出来ず、抱えられることも考えてもらうこともできずにいますと、その子は何やら受け入れられないものが己自身にあると感じることになりかねません。そうしますと、それらの部分は遠ざけられ、分裂排除され、彼の良き対象から遠く隔たったところへとどうやら投影されてしまいかねません。そしてそれらが戻ってきて、これら良き対象を危険に晒すといったふうに絶えず脅かしを伴うといったことにもなりましょう。ここで私は「どうやら・・・しかねません」といったふうに述べましたけれども、おそらく必ずしもそうでもないのかもしれないと申しますのは、母親とは別の誰か、とりわけ父親、もしくは他の親的な人物が側にいてくれる場合ですと、そうしたことも受容されることがあるからです。そうしますと、彼は十分に自分の本当に感じるところを分かってもらえたと感じる事が出来ましょうし、‘コンティンしてあげる内的対象 internal containing object’を、その子が己自身について心安らかでいられるように手助けしてくれるものとして、発展させてゆくことができゆくともいえるのであります。

取り分けて私はここで、或る種の‘コンステレーション・心の布置 constellation’についてご紹介したいと思えます。それらは母子関係において観察されたものでありまして、また分析的セラピーに於いての転移・逆転移を観察したことから演繹されたものでもあります。女性性及び母性というものが受容的で喜ぶ能力を有し、かつ思慮深い‘母性的対象’の摂り入れ同一視に基礎づけられていることが必要とされるといった趣旨からして、それが何らかの困難性を引き起こすものと考えられたのであります。ここで例えば、或一人の子どもを念頭に置いて話を進めてまいります。それは過度に占有的であり、どこか貪欲で、しかし潜在的には愛すべきものが備わっているといったふうな子どもです。こうした‘コンステレーション’を有した子どもがいくらか脆く傷つきやすいタイプの母親に出合ったとしますと、何らかの問題性が生じます。彼女は実際のところ子どもたちを十分に愛していますし、彼らのために精一杯のことをしようと努め、大いに思案を巡らすことも致しますわけです。しかし彼女は、そうした誕生後の最初の何日間に子どもが表出する‘原始的な要求 primitive demands’に接近し、関与し続けることをとても難しく感じるのであります。そう致しますと、子どもの側の或る種の‘猛々しさ violence’もしくは‘烈しさ intensity’といったものの深刻さは彼女には感知され得ないままとなるわけであります。

ここで、私の脳裏にはそのような或る子どもが浮かんでまいります。その女の子は最初の子どもではありません。しかし母親が見知らぬ国を訪れて以来初めて出産した子どもでもありました。母親は実家とはかなり隔たったところで、子どもたちと一緒に、夫が仕事で出張している間、置き去りにされていたわけでありました。彼女は他の2人の子どもには母乳を与えることができましたが、この小さな女の子については最初の数週間でそれを断念せざるを得ないこととなります。それは赤ちゃんがガツガツ貪り吸うのにとっても彼女のエネルギーが付いてゆけず、与えるお乳も尽きたふうに感じたからであります。哺乳瓶が与えられますと、赤ちゃんは相変わらずごくごくと貪るように飲みました。そして眠くなりこっくりしながらも、その乳首をがっちり口口に咥えたまま離そうとはしません。彼女の口の中でそれは噛み締められたままに押し潰されてましたから、口から無理矢理それを引き離すには結構難儀なのであります。哺乳瓶が導入されて以降、彼女は徐々に穏やかとなり、授乳時間の間も安定しておりました。しかしながら母子間の関わり合いの領域が大いに犠牲にされていたといえるのであります。赤ちゃんは母親の腕に抱えられながら哺乳瓶を吸っておりましたが、その目はどこか遠いところに焦点づけされたままでした。母親の方は、赤ちゃんと共に哺乳瓶をもいくらかゆったりめに両腕に抱えており、気持ちはどこかぼんやりと上の空といったふうで、注意を別のところに逸らしながら、赤ちゃんに哺乳瓶を吸わせていたわけでありました。例えば、観察者へと目が注がれ、ひたすら喋りに喋るといった具合に…。哺乳瓶が空になったとき、赤ちゃんは普通おしめを濡らすやら排便するといったことがあり、そしておしめが取替えられている間、何やら嬉しげな音を立て始めました。彼女の微笑、そして喉元をぐるぐる鳴らすといったことが母親の注意を惹き始めます。それでどうにか活力を取り戻し、赤ちゃんに注意を集中し、反応をし始めるわけでありました。彼女に話し掛け、鼻を拭いてやり、抱きかかえ、そして観察者に赤ちゃんを自慢してみせたりもするわけなのです。

どうやらこの幼い子にはそのニーズにおいて苛烈なものがあつたようです。母親にしてみますと、どうにも腰が引けてしまうような何かであります。彼女自らの言葉を借りますと、‘怖じけてしまう’といった具合に…。おそらく彼女は、赤ちゃんに哺乳瓶を与えた後、絶えず身を引いてしまうといったことを繰り返していたようであります。つまり母乳を与えられないことに済まない気持ちでいたからです。この赤ちゃんはこの尻込みしてしまう母親の気分を十分に察しておりました。ですから、彼女は哺乳瓶を吸いながらも母親をまともに直視することもなしに、どこか遠くの方に目を遣って、母親との直接的な触れ合いを絶っている。そうしたことが事実として観察されていたわけなのであります (Bick, 1968)。

この女の子は母親の手にする哺乳瓶にかじりつきながらも、己自身の総てを賭けて、そのあらゆる感覚そして注意を傾けて母親に向かい合い、そして自分を‘一人の人 person’と認めかつ受け入れてくれる‘コンテナ’としての母親、そして食べ物および慰めをくれる人としての母親を受け入れる代わりに、注意をまったく別のところへと置き換えんと躍起になっていて、そのように彼女自身の部分を‘分裂排除’させんと試みていたわけでありました。そのように私は考えました。彼女の口が熱心にミルクを飲んでいる間、彼女の眼は部屋のどこか遠い或る一点に張り付いていたわけでありました。授乳が済んだとき、そして彼女の身体的ニーズが満たされたとき、それから彼女はやおら母親へと注意を向き変

えるのです。そこには、ついさっき貰ったミルク程には渴望の兆しといったものは見当たりませんでしたけれども。しかしそれでも母親はそれで元気付けられ、再び活気を取り戻すといったふうでした。母親はこのことを十分察していたものと思われまゝ。なぜなら彼女は、赤ちゃん側からのそうした‘交渉開始’を嬉々として受け入れたからであります。

この赤ちゃんの場合、こうした場面からすでにその‘性格形成’が充分垣間見られますでしょう。その「プライマリーの内的対象」は幾分なりとも‘傷つきやすさ’を有しているということ、そしてどこかしら無感覚であるといったことです。結果的には、外界の対象に対してはいずれパーソナリティの力を総動員して幾らか躁的に償いをする傾向があるといったことになりましょう。観察からは、この子の心のうちで母親に自分が与えられる悦び pleasure を巡ってはどうか混乱があるように見受けられます。お尻からの排出物がいいのか、もしくは彼女の口から喉でごろごろ鳴らす音とか微笑みといったものがあるのか、それらのどちらだろうかといった具合に…。赤ちゃん自身の安心感は、彼女の口にしっかりと咥えられた乳首から派生するようでありました。(後に、これは彼女自身の手にと握られたスプーンに変わっていったわけですが)。彼女の眼が張り付いていたところの身の回りの見慣れたモノたちもそうでありました。後に判明しましたところでは、家族一緒に休暇旅行に出掛け、見慣れぬ環境に連れてゆかれますと、この子はパニックを起こすことがよくあったのです。母親そして他にも家族は皆一緒にあったわけですが…。

症例;オリビア

ここで論文のハイライトとして次にご紹介したいのは、或る一人の若い女性の分析症例であります。これ迄述べてまいりましたところの赤ちゃんそっくりとも言えるような、十分に抱えられることのなかった、でも生来激しい気性の子どもといった特徴の多くがこの女性の内に認められたと言ってよろしいかと思われまゝ。

オリビアは分析を始めた当初、20代の後半でした。愛した男性が白血病で亡くなってからというもの、彼女は摂食障害に陥り、抑うつ感で凍り付いた状態にあつたのです。彼女は家族のなかでは一番年下の子どもでした。一人2歳年上の姉がいて、子ども時代は随分と喧嘩もしましたけれども、その姉を熱烈に愛してもいたわけですが。彼女は幾らか内気そうで恥ずかしげに見えましたけれども、容貌は可愛らしく、女性っぽい様子であります。子どもの頃には自分は本当のところ男の子になるべきだったというふうに信じていて、自分は男の子だと空想していたことがあつたとのことでした。表向きのお転婆娘の虚勢は、実のところ社会的な臆病さを覆い隠していたわけですが。母親が大腸癌で1年近く入院しておりましたとき、彼女はやがて完治したわけですが、オリビアは当時7歳でありました。その折に姉と一緒に、彼女は遠く離れた町の伯父・叔母の元に預けられたわけですが。その当時、彼女は自転車を乗り回し、あちこちほっつき回っていたのですが、或る日転倒し、それで自転車のシートが股へと

突き刺さり、それで処女幕が裂けたということがあったのを思い出しました。この記憶はまた、自慰がゆえに性器を取り返しのつかないほどに損傷させたという確信が表出されていたもののようでもあります。

青年期には、その厳格な家族背景に反抗し、それで或る期間どちらかという性交渉は乱脈ぎみでした。相手が時には既婚者、それも最初の頃には彼女の大学の教官の一人でありました。その当時、多くの青年期にある子どもにも似て、どうやら彼女はその情緒的な孤立感をやわらげるために身体的な接触を求めたものといえましょう。関係することで身体的には満足をもたらしたとしても、彼女の‘自分を知ってもらうことへの飢え’はさほど癒されることはありませんでした。また彼女の欺瞞の感覚、自分が何か邪悪めいたことをしているといった思いは底知れず、拭いようのないものだったのです。彼女のお姉さんは、学業成績はあまりかんばしくなく、母親とは折々に諍いをすることもあったわけですが、でもそれから家族全員がとても好ましく思っていた或る男性と幸せな結婚をしております。オリビアはとても勤勉家でしたし、科学の分野ではとても秀でた才能を発揮したわけです。それについて父親は女性らしくないという評価でしたが、しかしもしも彼が若い頃にその機会が与えられたとしたら喜んでその分野への進出を図ったはずだというふうに彼女自身としては内心想っていたわけなのです。

やがて彼女の20代半ばで、父親の死のすぐ後のことでしたが、或る尊敬していた、20も年上の男性と真面目な恋に陥りました。彼の結婚生活はうまくいっていませんでしたし、彼女のことを深く気に掛けてくれていたのは確かなのです。しかし彼らが同棲して間もなく、彼は青年期の実の娘達のことが気掛かりで、それで元の家族へと戻ってしまったわけです。そのショックで茫然自失し、そして彼に見捨てられたということでオリビアは自棄になっていたのですが、そこに妊娠していることが判明します。恋人にそのことを告げることなく中絶手術をし、その土地を去り、別の大学へと移籍してしまいます。何ヶ月か経て、彼は自分が白血病であることを知ります。そして最終的に家族を離れ、彼女ともう一度暮らすことにしたということでもあります。そしてその一年後に彼は亡くなります。そのすぐ後、彼女は分析を求めて私の許を訪れました。自分は分裂病ではないか、もしくは癌になって死にかけているのではないかと恐れながら、でも情緒的には無感動で、唯無為に日々をやり過ごしていたのです。

最初から彼女はとても協調的でありました。夢を持ってきましたし、それらの連想も豊富で、それに問われればその都度礼儀正しく応答もいたしました。ですから分析にかなり熱心であったとはいえませんが、感情は平坦で、たとえば私からもらうコメントにどこか心が揺さぶられる場合には、どう判断したものかさっぱり途方に暮れる感じがありました。彼女は時間にも几帳面であり、セッションには必ずまいりましたし、小切手の支払いもそうです。複雑な専門的な仕事を抱えており、それを疎かにしないでセッションに通ってくる時間を工面するというは大変なことでした。それをやり抜いたのであります。こうした物事を几帳面にこなす彼女の姿勢は、週末のセッションがお休みになるたびににやらか崩れるのでした。ちょっとしたヘマなことをしたり、もしくは危なっかしい行為をやらかしたり・・・例えば、赤信号の交叉点を車で突っ走るとか、スーパーマーケットでミルクのビンを棚から落としてしまうとかです。これら故意ではない、うっかりミスといった無意識の行為は、とんでもなく彼女を不安に陥れるのでした。恰も

足元が崩れてすべて彼女の人生が水泡に帰すといったことの予兆でもあるかのように、またそれがいわゆる分裂病の発病を告げるといったふうに…。彼女が懸命に仕事に没頭し、日々の暮らしを頑張るのは、それでなんとか切り抜けるためのようでした。かつて幼い頃母親から離れていた折に自転車を乗り回していたときみたいに…。分析セッションの最初の何ヶ月間、自分について話をしたり、興味深い解釈がもたらされるような資料を提供したりといったことは、そうした何ごとともうにか我慢して耐えるといった彼女のいつものやり方でしかなくて、そこで彼女自身を幾らかでも解明せんとするための手段として求められていたわけではなく、そして私に対してのニーズといったものでもなかったわけです。彼女は分析に熱烈に依存していたともいえますし、それが人生に救いをもたらすうえで必須とも思っていたわけですが、それで自分の心の状態に何らかの変化を期待できるとは思われず、もしくはハッピーに感じられる自分を心に描くことなぞとても出来なかったわけでありました。

彼女の記憶にある‘忌々しいこと’の一つとして、優しくったおばあさんが、ちょうど息を引き取る寸前に、片目を開け、そして彼女をまっすぐに見据えて、咎め立てするように<二度とそんなことをしてはいけません>と諭したということがありました。それでわれわれは分析セッション中しばらくの間、このずっと彼女の頭に引っ掛かっている記憶に戻って、‘そんなこと’とははたして何であったのかを思案したわけでありました。そしてまた、彼女が私という分析家に転移しているもの、つまりそうした厳格で禁止命令に縛られた長老教会派によくあるところの‘良心 conscience’といったふうな、それがいかなるものかを探索していったわけでありました。それがため、破壊的な行動についてのあらゆる解釈は、(なぜなら分析の最初の頃、破壊性は情緒としてこころの内に抱えられるのではなく、行為でもって表出されていたから)、叱責として、そして‘やってはいけません’といった手厳しい勧告として見做されることになっていったわけでした。もしくは、解釈は彼女にとって過酷な非難・攻撃として感じられ、それで非情さ、もしくは秘密裏の躁的な嘲笑の殻へと身を縮ませ隠れてしまうといったことのようにありました。その後者については、彼女が<あらゆる悪夢の極めつけ>と呼んだところの、恐ろしい夢において発覚しております。「彼女は地下の部屋にいました。床には石が敷き詰められており、霊安室もしくは畜殺場にも似たような部屋でした。遺骸が安置台に横たわっており、どうやら手足がないみたいです。内蔵が飛び出ており、血があちこちに溢れておりました。しかしそこでほんとうに恐ろしいと思われたのは、そのお隣の部屋で、彼女、それも7、8歳の子どもですが、声を張り上げて笑い、そして腸を縄跳びのロープにしてスキップをしていたことなのでした。」この夢は母親がかつて直腸癌であったことに関連づけられました。そしてこのことを巡って彼女が感じたところの母親への思いやら絶望感を処理するに当たったの躁的および無感覚なありように恐怖を覚えたということのようでした。ここで鮮やかに思い出されたことがあります。母親が病院へ出掛ける前にトイレで便を漏らした跡を見て、それで嫌悪感と侮蔑の念であとざりしたことがあったことを…。

われわれはやがて徐々に分析の経過を通して、彼女の‘眼’の使い方、それに物事を見る見方がどれほど彼女自身の病気のルーツであるのかということを理解してゆきました。それも極めて微妙なあり様であったわけですが…。彼女は子どもの頃のことを想起します。両親の寝室の開け放たれた扉の

前に佇んでその中を覗き込みながら、何かとてもいけない(お行儀の悪い naughty)ことをしているといった感じを抱いたということです。この‘お行儀の悪い’まなざしとは、相手の性格上の弱点および欠陥を抉り出すといった秘密裏ながらも、的確ともいえる彼女の認知能力に関連していたように思われます。例えば、彼女は父親の心気症的な傾向、すなわちいかにも自分こそが家族のなかで一番重要な赤ちゃんだといわんばかりに母親の同情にすぎる傾向があるのに気づいていました。それは彼女をして‘小児的信仰 infantile belief’に固執させたともいえましょう。すなわち両親間の性交とはオシッコを掛け合うことであり、それでママは便器になっていて、パパのくれる尿をもらっているといったことです。それからまた‘彼女のなかの幼い男の子’は自分のオシッコのほうがパパのよりもずっといいということを頑強に信じ続けているわけであります。彼女の児童期における自慰行為は、窃視症そして尿失禁を伴っておりました。彼女の男性との性交は、分析が進展を見るまでは、往々にしてオルガスムスの瞬間において尿失禁することの空想を伴っていたわけであります。母親の便の失禁についての児童期の記憶は、‘詰まったトイレ’として夢の中で時折現れる‘内なる母親’についての絶望感をはっきりと示していたわけなのです。これらの夢において、何度も彼女はオシッコをする幼い男の子として繰り返し登場しておりました。夢のなかで父親もまた排尿していました。それで時には庭先の植物に害を与えていたということになります。折々にこうした特徴が夢に繰り返し現れること、尿的な性交が執拗でいっかな消えようのないことにオリビアはひどく憤ることがあり、それで不機嫌になるか、抵抗するか、もしくは躁的に笑い飛ばすなりしたものであります。

彼女はほとんど毎回のよう夢を持参してきました。それというのも、実のところ私を‘分析的母親’としてご機嫌よくさせてやろう keep me happy と強く願うことに動機付けがあったわけでした、彼女が夢を持参してこない日はそうした解釈に抵抗していた時期であります。本質的なところで彼女こそが‘乳房を授乳している赤子’なのであり、もしくはオシッコをするペニスでもってママの‘小さな夫 little husband’であると信じ込んでいる幼い男の子なのでした。われわれがこのことを徐々に明確化するまでは、彼女はそれら夢が明らかにしてくれることがらに何ら価値を見出さないといいふうでした。彼女はそれら夢を記憶し、私のもとに持参してくることは懸命に努力しました。しかしながら私がどんなにそれについて分析を試みたとしても、必ず私の解釈は何かしらの外れだったのであります。例えば、彼女は私の解釈の内容を認めて、確かに私が語ることは知的には意味がわからなくはないけれど、しかしそれについて何も感じないし、だから何の役にも立たないと言うのでした。それで何かしら心に触れるものがあるとしたら、それは‘彼女のなかの赤ちゃん’に語りかけられた‘ことば’だと言います。分析的な営み及びそこで理解される大部分が‘万能感的なオシッコする幼い男の子’によって消耗されてしまっていたのです。分析の外では彼女は教師として優秀でありましたわけで、それも学生たちを相手にしての或る種の躁的償い manic reparation といったことになりましょう。その彼らはどうやら母親の子どもたち、そして彼女自身の墮した赤ちゃんを(それも基本的には母親の殺害された子どもと見做されていたわけですが)表象していたものといっていいでしょう。彼女が新しいポストを与えられたとき、それは彼女のキャリアにおいてかなりの昇進を意味していたわけですが、最初に彼女の脳裏に浮かんだのは寡婦となった母親へ長距離電話をするということでした。彼女がどんなに喜ぶかと思ったとか。。。

どんな解釈も‘彼女の内なる赤ちゃん’には届きそうにありませんでした。その赤ちゃんは、実際のところ理解されることに飢え、情緒的な滋養を求めているようではあったわけですが、私のアプローチにはしばしば痛手をこうむるだけでしかなかったのです。このことから、私は解釈の方法、並びに私の語ることの内容について深く吟味せざるを得ませんでした。もしも、彼女が言うように、私が主眼点にあまりにも急速に接近するとしたら、それをあまりに性急に彼女に投げ与えようとすれば、彼女は侵入されたように感じ、痛手を受け、そして怖じ気て引っ込んでしまうのでした。態度を硬化させ、全然何も受け付けなくなるわけです。彼女は、まるで乳幼児のように振舞いました。まずは口をしっかりと閉じて開けまいとすること、もしくは受身的にその注意が別の何かに向ける間に食べ物を口に無理矢理押し込められることに我慢するといったようなことであります。もしも私があまりにも長く話し続けたり、もしくは時としてあまりにも意欲的に話す場合、(彼女の提出するマテリアルに私としては綿密に忠実であったわけですし、それで彼女は私の言うことにしっかりと耳を傾けているに違いないと思っているときにせよ)、彼女は息苦しく溺れそうになっていたということになります。こうした彼女の心的状況を‘赤ちゃん/オツパイ’といった言葉’で描写して明瞭にせんと試みたことがとても助けになりました。とりわけ或るコメントについて彼女が語ったのは、<それは確かに真実ではあるけれども、ちょっと唐突すぎて赤ちゃんにはとても飲み込むのは無理だわ>ということでした。もし私がそれを時折するように何らかの物語として彼女に伝えられたならば話は別だろうし、それでどうかそれを飲み込むことが出来なくもないとのことでした。ここに、どうやらその口を開き、乳首を咥え、その貰うところのものを味わう前に、‘前戯’のようなもの、抱っこか宥めの声掛けやら語り掛けが必要で、それで母親にじっくりと自分のことを考えてもらえて、コンテナも受容もされていると感じられることを必要とする、そんな赤ちゃんがいるということになりましょう。

勿論、私の解釈に対しての彼女の態度についてその問題性を云々するだけでは充分とは言えないわけです。彼女がどうしても飲み込めないと思うところの論点の中身についてもっと突っ込んだ理解が必要のようでありました。すなわち投影にがっぷりと取り組むことなのでありまして、その矛先がわが身に向けられるのは実に心が傷むわけなのでした。彼女は読書家で、かなりの量の精神分析関連の書物を精読していました。それを自分自身にも当てはめ、私の解釈を封じ込めんとして、どんなに微かな挑発であっても、私の先手を取るが如く、むしろ喜んでそれに飛びつき、己自身の羨望やら貪欲さに鞭打つことをしたのであります。これらは、どうやらいわゆる‘分裂病’もしくは‘癌’といった、彼女が運命論者的に懲罰として自らに帰したところのものであったようであります。それらは勿論われわれ誰しもが有するところの精神病理の要因でもありましょうが、彼女自身の様相としてそれらは知的には了解されているとしても、情緒的体験レベルでは殆ど大部分が未知ともいえるわけであります。それらはどうやら‘硬い対象 a hard object’へと投影される傾向がありました。すなわち乳首もしくはペニスであります。彼女は己自身を罰するためにそれを掴んで離さないといった具合でして、さらには、私が硬直した機械的な分析で彼女をとことん打ちのめすといったふうに咎め立てるのであります。

この咎め立てには並々ならぬ苦痛を覚え、私としては時には彼女の気持ちを傷つけずにそれらマテリアルにどうアプローチすればいいものやら途方に暮れることがあったわけです。しかしながら、もしも私が

退却でもしようものならば、つまりもしも私が彼女とのコミュニケーションに、そして彼女が私のなかへ投げ込んだところの苦痛に果敢に取り組み続けているとのエビデンスを与えずにいるとしたら、彼女は混乱し絶望するであろうことは明らかでありました。転移状況に於いて私の脳裏に浮かんだイメージは、気性の激しいかつ熱情的な幼子であります。オッパイに対して貪欲であり、そして母親の腕のなかにしっかりと抱きかかえられないとしたら今にもバラバラになってしまいがちな、そうした子どもです。さらには、繰り返し退却を試みようとする母親、赤ちゃんの‘猛々しさ violence’を察して対処することの力量も感受性も備わっていない母親、詰りのところ子どもへの思いは充分にあるにしても、己自身が経験していないことにはいかんとも為し難いといった母親をしょっちゅう経験している、そんな子どもでもあります。セッションの或るときには、この幼子は、例えば「畜殺場の夢」のなかでも表れているように、彼女自身の分裂した部分によって急襲されるみたいであります。すなわち、母親の‘無感覚性 insensitivity’に同一化し、混乱に至り、厳しくも非情で過酷な超自我として機能し、かつ傍観者として佇むところの冷淡で無情かつ嘲笑的な存在と化してしまうといったわけであります。

こうした心のありようはコンティンされ、かつ徹底操作され始めてまいります。転移に於いてそれを跡づけ、セッションの中へと取り込んで、その状況をそのままに抱えんとするといった私の能力に彼女が徐々に信頼を寄せるようになってきたからであります。自慰、もしくは優しさも愛情もなしに性的な関係を持つといった‘行為化 acting out’は減じてゆきます。徐々に彼女の‘受容的な母親対象’を内在化する能力が募り、結局のところ自分も愛されるに値するかもしれない、赤ちゃんだって孕むことが出来るかもしれないといった希望が芽ばえてくるようなのでした。それからやがて彼女は彼女と同年代の或る一人の男性との関係を築いてゆくようになります。彼を尊敬していましたし、性的にも情緒的にも満足的なものでありまして、結果的に彼らは結婚したのであります。

私はここで、オリヴィアが妊娠初期に見た一連の夢についてお話いたしましょう。それは彼女がどのようにして一人の母親になる将来へ向けて心準備していったかということが示唆されております。最初の夢は次のようです。《彼女は出産前検診のために「産婦人科クリニック」を訪れたつもりでした。でも実際はその代わりに「眼科」に行ったことが判明されます。そこでは女医さんが若い女性に手術が必要だと語っております。彼女の眼球は悪くはないのですが、瞼を縫合する必要があるとのことでした。》
オリヴィアは目の隅に軽い障害があり、それで診察が必要でした。夢についてあれこれ連想を続けてゆきますと、誹謗中傷の一瞥といった「斜視」に関連していることが語られ、それはわれわれには馴染みのあるものだったわけです。すなわち、夜に両親が一緒にいるときにその目を閉じようとする子どもというのは、己の‘邪悪な目’がその刺すようなまなざしを母親のなかの赤ちゃんに投げ込むわけあります。つまりは、ここに墮胎及びそれが無意識に繰り返されるのではないかといった彼女の恐れが含意されていると言えましょう。女医は分析家であり、この場合‘お漏らしする目’を持っている若い女性に注意を促したわけであります。

その次に語られた夢は、以下のようでありました。《二人の若いブロンドの髪の毛をした友人たちが

いて、その外見は彼女にとってはとても好ましい印象でした。彼女らは新しい春の装いをしている彼女を訪ねてきたようです。彼女は彼女らに会えたことをとても喜びます。しかしすぐにオシッコをしに中座(脇へ避ける)しなくてはなりませんでした。それから、なんとそのオシッコから小さな貝の中に眠る、小さくともまるつきり完璧なかたちをした胎児が出てきたのでギョッとします。》 この夢はたくさんの連想を伴い、そしてとても複雑な意味づけがされております。しかしその当時ここでわれわれが取り組んだ主要テーマは、‘彼女のなかの子ども’が「オッパイ」(それはしばしば若い女性として象徴されております)を見てその美しさに圧倒されるということでした。これら二人の若い女性たちは、私そして彼女みたいにプロンドの髪の毛であります、どうやらそれは彼女の理想化された女の子っぽい女性性を表徴する「自己愛的対象 narcissistic object」のようでありました。子どもの興奮といった‘強烈すぎる too strong’感情から守られなくてはならないわけです。その意味でそれはいかにも‘傷つきやすい vulnerable’といったこととなりますが、(これらの若い女の子たちについての更なる連想からして)、彼女の妊娠をどうやら妬んでいると恐れられてもいたと言えるのであります。

この夢に次の夢が続きます。《彼女とその夫は一緒にベッドに横になっていて、天井を見上げておりました。なんとそこは鳥の糞で覆われていたのです。彼女は狼狽しながら、これは自分が住まいをきちんと清掃することを怠っているからだと考えます。》 彼女の夫は彼女が眠りに就く前に裏庭に飛んでくる二羽のシジュウガラ tits について話していたのです。この夢はどうか、彼女の大人の性交に隠されてある‘自慰的なクオリティー’、まだその痕跡は歴然としてあったわけですが、それを拭い去ることがどうしても必要だといったことに触れられているようであります。またそれに加えて、天井の‘シジュウガラ’(すなわち‘乳首’)※にオシッコを引掛けるみたいにして、彼女の自己愛的な‘幼い男の子の部分’が、両親と一緒にいるときに味わうところの‘邪悪でかつ汚れた感情’を排出せんとするといった意味を有していたことになりましょう。(詰まりのところ、遠くから覗き見している赤ちゃんがそうであるように!) 上述したことから彼女は、自分のお尻をしっかりと綺麗なものにしなければ clean up her bottom といったことを想起させられたわけなのであります。この夢についての分析のしばらく後、彼女は夫との性交中に、彼のペニスが‘赤ちゃん’を傷つけはしないかと恐れたということを語っております。[※訳註; この場合の「tits」はシジュウガラの他に‘乳首’の意味がある。]

これにはまた、次なる夢が続きます。《その夢の中で、彼女はかつて観た或る映画を追体験していたこととなります。観劇中、彼女は泣けて泣けて涙が止まらないほどでした。何故そんなにも彼女を泣かせたのかといいますと、映画の中で見た田舎の美しさ、それと以前、第一次世界大戦においてそこには塹壕があり、その村落でかつてたくさんの兵士たちが死んだということ、そのコントラストだったのです。取り分けて、映画のなかのヒロインの女性の夫は出征してやがて戦死してしまうのです。彼女は子どもを妊娠していたわけでありました。その地域にはあまりにもたくさんの死んだ遺骸が残っており、地下を掘ってそこに埋めてやることのできないほどだったのです。それで歩兵小隊が進撃しながら音を立てて歩く場面では、彼女は尽きない悲しみに胸の塞がる思いがしたわけでありました。》 この夢から、かつてのバラバラに切り刻まれたからだに氾濫する「畜殺場の夢」を彼女に想起させたのであります。しかしその

夢のなかにあった恐怖とマニアックな熱狂は、彼女の父親の死、そして寡婦となった母親の孤独、中絶そして彼女のかつての恋人の死、それから彼女がその教え子であった、私の元夫であった人の死について数年前たまたま知ったことの悲しみに満ちた記憶に取って替わられたのであります。私が以前住んでいた家、そこに最初彼女は分析に訪れてきていたわけですが、その昔の庭の思い出を懐かしがる一方で、私の現在住んでいるフラットの玄関先にも樹木が若葉を芽ばえさせていること、庭に植えられた水仙ももう直に蕾が開きかけていることを認めたことで、嬉しさに心溢れさせたのであります。

この翌日、彼女はこんな夢を見ております。《彼女とその姉とが或る男の人からそれぞれ球根を貰いました。球根は二種類あり、黄色と縞模様ということでした。それらは次のクリスマス前には芽が出るだろうと聞かされます。しかしそれ迄はどっちがどっかは見定めることはできないだろうということでした。》目覚めたときすぐに彼女が思ったことは、絶対に妊娠しているということでした。男の子かしら、女の子かしら？彼女の姉は二人の子どもを持っておりました。二人とも男の子です。彼女は女の子が欲しいし、夫は男の子が欲しいのです。しかし男の子と女の子の両方一人ずついれればいいなということでした。そして再びここで彼女は悲しみと幸福感が一緒に混じり合い、感極まって泣き始めたのであります。悲しみは彼女の喪った赤ちゃんのためであります。その性別は知らないとしても…。そして悲しみと幸福感は母親に対してです。おそらく彼女はどれほど彼女のために喜んでくれるだろう、そしてまた孫がもう一人増えるということもどんなにか嬉しいに違いなからうというわけです。それから愛情が込み上げてきました。それは彼女のお気に入りの甥のためです。彼女が結婚しそして赤ちゃんが産まれたら、自分のことはそんなに愛してくれないんじゃないかとちょっとせつなそうに彼が言っていたからなのです。彼がその心もとない感情を彼女に率直に打ち明けてくれたという、そうした信頼を寄せてもらえたことで彼を愛おしく思ったのです。たとえ嫉妬心があったにしても、彼女の場合にはさほど折り合いが付かなかったわけですが、彼の場合はいづれうまく折り合いが付けられる、大丈夫だろうと思ったのです。

引き続いて彼女はこんな夢を見ました。《彼女とお姉さんは一緒にボートに乗り、沼地めぐりをしながらどこか島に向かっている途中であります。ボートは水に半分ほど浸かった状態です。オールが無かったので、彼女は手で漕いでおりました。でもそれも必要ないということが判りました。どっちにしても流れは彼女らを陸地へと連れて行ってくれるようなのでしたから。彼女はリラックスしています。ボートは彼女らを浜辺へと運んだところで、ついに水底に沈んでしまいます。足元の砂は白く、とても柔らかく感じられました。一瞬まるで砂の中へと引きずり込まれるような錯覚を覚えました。でも大丈夫足元はしっかりしています。少し遠くに別のカップルの姿が見えました。彼らに手を振ります。そのビーチを歩いてゆきながら、どうやら自分は間違った方角にボートを漕いでいて、それで到着が遅れたらしいということにふと気づかされたのであります。》この夢で彼女はお姉さんと一緒にボートに乗り合わせていたわけですが、結局のところようやくにして‘間違った方角’に漕いでゆくことを諦めたということになります。それは、万能感的な自慰および支配性を断念するといった、分析における最後のステップを示唆します。そして彼女らの母親とのポジティブな同一視といった点で彼女はついにお姉さんに合流するに至ったようであります。‘漕ぐこと rowing’は、勿論口論・諍い row をも含まれておりましょ。ですから、ここ

には母親との和解が意味されてもおります。そして彼女の‘内なる対象’の導くところの流れに身を委ね、それがいずれ彼女を‘海岸’※へと上陸させてくれることへの信頼もまた…。彼女がついに島に辿り着けたことはまた、‘誕生’と見られているようにも思われます。‘内なるオツパイ an internal breast’、柔らかで受容的、それでいて堅固であるといったふうなそれに助けられ、さらにはそこに既に居た別の‘カップル’にも支えられてゆくでしょう。(すなわち、‘結束する対象 the combined object’とは、部分対象レベルではオツパイと乳首であります、もしくは全体対象レベルではカップルが一緒ということ、すなわち彼女の誕生に責任のある両親になるわけであります)。[※訳註;この言語 shore には別に「支柱・支え」といった意味がある。]

ここで最後に提出されます分析のマテリアルと申しますのは、オリヴィアが私と偶然街で会った翌日、金曜日の午後であります。これは彼女の分析経過に於いて実にユニークな出来事なのでした。彼女は途轍もなくショックを受けたと申しました。いかにも身を晒したといったふうに、まるで何もかも喪うといった具合に自分を脆く感じたのであり、まるで血の気が引いてゆくような感じで、彼女の内側は崩れてしまうかのようなことでした。その日ずうっとそんな感情を引き摺っていたようであります。以前彼女が一度私と握手したときに感じたときの感情とは逆であります。その折は彼女の感触 touch がまるで私の皮膚を通して永久に染みとおってゆくように感じられたのです。しかしともかくにも最終的にはどうやら何かしら残ったということを彼女は悟ったのであります。私との間での距離感を覚えながらも、だからといって何も喪ってはいない、完璧に何かしら内側に有るといった手応えを掴んで、その日は終わったとのことでした。彼女自身が語ったところのより抽象的な物言いをすれば、詰まりのところ、彼女はついに自分が私にとって‘特別’であるとか必要不可欠な人物であるといった考えを断念せざるをえないということ、すなわち私は私という固有なる存在 existence であるということを知ったということなのでした。しかしそこには経験の具体性がまだ伝わってきません。彼女は、私が夫と一緒に週末を過ごしているということを嬉しさでもって考えている自分のいたことに気づきました。この経験の結果、彼女は初めてディナー・パーティーに出掛け、なんとそれを愉しんでいる自分に気づいたのです。たぶんそうしたことも永久に続くわけではなく、凡てのことに常に終わりは付きものなのだと理解したせいでもあります。それ以上に、彼女はその夕べの集いの途中で、そこにいた或る人をまるで見知らぬ人と思っていたけれど、どこか昔に出会っていたということをふと思い出したのです。彼女は、彼の事を忘れられていたことを喜ぶと同時に、彼のことを思い出したということにも等しく嬉しさを覚えたのです。

このディナー・パーティーの後、彼女は夢を見ました。その夢のなかで、「私は彼女に以前通ってきた或る分析患者について話をしています。若い女性でありましたが、予想していたより早めに分析を終了したのです。その理由というのは、どうやら‘水洗トイレ’がどうのこうのといったことのようにでした。」この夢の連想として彼女が語ったのは、次のようなことでした。まず最初の一つ、彼女もよく見掛けることのあった私の元分析患者はその分析終了後も事実とても首尾よく暮らしているということを彼女は耳にしているということでした。それからもう一つ、夢のなかの‘水洗トイレ’ですが、ディナー・パーティーの席で話題となり、それで皆で笑い合った或る事が連想されました。一人の或る青年期の女の子が

何とヘッドミスレス(校長先生)に向けて路面の排水口の蓋を投げつけるといったことでした。彼女は罪悪感を覚えました。笑いはその場にはふさわしくないと考えたからです。先生は危うくも殺されかけたのですから。そこからさらに彼女のプライマリースクールの或る男子生徒についての連想へと導かれます。彼は自宅でも、もしくは学校でも決してトイレを使用しないということです。それでいつも自分の排便したのを新聞紙に包んで、どこかコートの下とかクッションの下に隠しておくんだそうです。

このセッションでオリヴィアは、はっきりと分析の終結を心に描いておりました。そしてやがて別れがあるということ、そして外界の対象を喪失するにしても、彼女本来の何かしらが残るということ、それゆえに経験は維持され、そしてこれからもその成長は援けられてゆくといったふう感じられ、安堵したわけがあります。彼女は彼女の内なる‘よくない部分’—便と尿とか—を理想化して隠し持っている必要などないのです。なぜなら彼女のためにそれらに対処してくれる‘トイレ’があるのですから(メルツァーの‘トイレ・オツパイ’ [Meltzer, 1967])。彼女は希望を込めながら、それを‘内なる対象 internal object’として心にイメージできたのです。そうであればこそ、それが物事をうまく腑分けし、真に彼女にとって必要なものを選びとってゆくことを手助けしてくれましょう。忘れられていいものは除去され、でも必要があればまた再び思い出すことが出来るといった具合に…。始終何もかもきっちり記憶に縛り付けておかないと極めて重要な何か永久にすり抜けてしまう、それもまるで赤ちゃんが尿から落ちこちってしまうといったみたいに(!)、そんなふう考える必要などもはや全然ないということなのです。

ここで最後に、この論文に於ける幾つか主要なる論点を纏めてみましょう。オリヴィアの分析を簡潔に述べますと、かつては欠陥のある不完全な‘内なる母親’に同一視していたところの若い一人の女性がやがて「成人の女性性及び母性」の獲得に向けて大きく成長していった一つの事例として見做すことが出来ましょう。私は、この事例を或る一つの母子関係性の短い描写に結びつけて考察してきました。それにまた、こうした幼児的な転移及びオリヴィアとの分析中に私のうちに展開したところの逆転移に注視することを終始怠らないことが、いかにして‘彼女の中の赤ちゃん’がいっそう豊かにかつ深い感情のスペクトルをコンティンできるところの‘より強靱な母性的対象’を取り込む手助けになったかといったことの‘エビデンス’を示したつもりであります。‘成人の女性性’とは、すなわち情緒的な経験を、身体的な経験と同様に、深く受け入れられる心の準備が備わっているということでありまして、それは究極にはこうした類いの受容的对象の摂り入れに基盤があるということを、私はここに示唆したかったわけなのであります。(訳出; 2016/03/20)

※原典; 【The early basis of adult female sexuality
and motherliness.】 (1975) by Martha Harris
In; 【Collected Papers of Martha Harris and Esther Bick】
(1987). pp.185-200.

【訳者あとがき】 ～ <自分の値打ち>を知ること ～

山上 千鶴子

「精神分析」とは何かと問われれば、<それぞれ‘個’が己の値打ちを見つけてゆくこと>と私は答えるだろう。そんな思いつきが一体どこからやって来たのか、その源を遡るとどうやら私の内なるマーサ・ハリスに突き当たる。この論文中の《症例オリヴィア》を読みながら、改めてその確認される思いがした。悲しくもオリヴィアの心が迷子になっている。その‘迷子の心’をマーサ・ハリスは呼び寄せる。己を無価値なものとして愚弄し侮蔑する彼女にマーサ・ハリスは寄り添い、その値打ちを解らせてゆく。やがてオリヴィアの‘心の向き’が変わってゆく。己自身に背を向けていた彼女が向き直るのである。そしてくああ、私にも値打ちが無くもない・・・>と安堵で心満たされる。こうした感動の余韻を踏まえて、さらに少しく思うところを述べてみたい。

「自分の値打ちを知る」ということは、女性性及び母性が育まれてゆく上で(男性性及び父性についても同様だが)よりいっそう根源的なことのように私には思われる。つまりそれらの基盤として必須条件ということになる。さて、ここで《症例オリヴィア》だが、摂食障害並びに抑うつ症といった彼女の病歴については詳しく述べられていないわけだが、彼女を病へと導いた心の懊悩というのは<自分の値打ちがさっぱり分からない>ということに尽きていないか。これは侘しい！マーサ・ハリスという分析家に恵まれた彼女がどれほどのアテンション(注目)を注がれたか、それで彼女の頑なに萎んだままの<わたし>が緩く解(ほど)けてゆき、やがて‘産む性としての女性性’そして‘いのちを繋げてゆく性としての母性’に目覚め、彼女のいのちを侵蝕していた侘しさがいつしか払拭されてゆくさまがこの分析治療過程を通して覗かれる。実にさもありなんと感じ入るものがあった。分析の眼目とは解釈がすべてではない。こうしたいのちが弾(はじ)けてゆくさまをじっくり愉しめる能力が分析家に求められていると思われる。これは心理臨床家として心すべきことではなからうか。そしてこの論文を通して、まさにマーサ・ハリスならではの感がした。

子育てというのは、感動があればそれだけで親として充分だろうと私は思っている。子どものすること為すことが悉く面白い、どうしてなのかなって‘不思議’を覚える、そんな感受性が必須であろうかと思われる。つまり心躍らせること。例えばいたいけな幼児の微笑であるが、それに母親は大いに魅了される。もう嬉しくてならない！そこでまさに子どもは、母親に与え得る何ものかを自分が持っていることに自信を持つ。これだ！これこそが‘自分の値打ち’の源泉とっていい。子どもというのはいつでも<見て！見て！>なのだから。くまあ、凄い！>と感嘆されたいのだから・・・。これこそがおそらくオリヴィアに欠損していたと言わざるを得ない。だとすれば、とことん<自分の値打ちが分からない>というのは必然であつたらう。幼児の彼女は両親の寝室の開けられた扉の前に立ち竦む。もしもそこに一歩でも踏み込めば<That's naughty(いけません！お行儀悪い子ね)>の叱責の声が飛んできただろう。

そこに居たであろう両親にとって自分は招かれざるもの・名前を呼ばれることのないもの、つまり＜要らない No,thank you!＞なのである。どんなにどうしようとしても、届かない・響かない・撥ね付けられる、だから己の心の持って行き場がない。そして彼女は‘いけない子 naughty’の己自身を罰するかのよう
に‘自傷’ともいえる行為へと走り、‘自虐’を募らせてゆく。本来それも悲鳴をあげ、何ごとかと駆け参
じてくれる親たちを呼ぶためであつたらう。幼い彼女の自慰にしろ、そしてやがて後の不倫も中絶も・・
彼女の無防備かつ浅慮な態度のすべてが、＜助けて！＞と親たちを呼んでいたのであろうに、それが
いっかな届かない。それどころか親には面汚しでしかない娘となる外ない。そこには冷やかなもの、そ
して侘びしいものしかない。オリヴィアにもしも‘罪’があるとしたら、それはそもそも親たちに起因している。
子どもを自立させるという名目であれ、子どもにしてみれば一人で眠りに就くときの壁一つ分け隔てら
れた、その向こう側の親の非情さが恨めしい。当然であらう。それで自立したからといって何が嬉しいか。
そんな恨みを彼の地の子どもたちに私は感じた。真底侘びしいだけだ。やがて訳知り顔に彼らも立派
に一人前となって、結婚し、子どもを作り、自分が味わった思いをそっくりそのまま子どもに課してゆくだ
けで・・。そうして親子間での‘罪’の連鎖は続いてゆく。そこに「精神分析」は介入せんとしているよう
だが・・。歴史的に見ても【タヴィストック・クリニック】はそれを率先してきたわけだし、それも徒労とは言
えまい。だが、やはり思い起こすと、【タヴィストック】に集う人々の多勢が、決して言葉で語られることは
なかったけれど、どうもそれぞれに親子間に纏わる侘しさといった翳りを背負っているようだった。勿論各
各自が「パーソナル・アナリシス」を受けているわけだから、そうした家族背景に突っ込んで何らかの個人
的な纏れた感情を互いに口にするなど普段あり得るはずもなかったわけだが・・。振り返って思うに、
皮膚感覚でぬくもりを感じられるひとはごく少なかったというのが率直な印象なのである。であればこそ
の「精神分析の隆盛」というのもどうも‘倒錯’めいてはいないかしら。ここら辺りに Dr.ジョン・ポウルビー
の尽力で【タヴィストック・クリニック】に於いて「ファミリー・セラピー」が導入されていた真意がうかがわれ
よう。ポウルビーというお方は、あの当時私が【タヴィ】でも稀有な‘フェア-fair な魂’と感じ入ったところ
の人物で、おそらくイギリスの家庭状況が子どもらにとってまったく‘フェアではない(unfair)’というこ
とを深く憂慮しておいでだったのであらう。そして児童臨床に於いて‘心の内的現実’を偏重した Mrs.エ
スタ・ビックを、やがてコースの統轄の座から退けたのも頷ける。とにかくオリヴィア一人に限らないのであ
る。イギリス人とはその階級を問わず、概して厳しく、寒々として、実に侘しい。マーサ・ハリスはスコッ
トランドの血筋だから、幾らか趣きが異なるわけだが・・。そしてふと思う。親子揃って、何でもいい、一
度でもいい、心の底から一緒に(!)笑うことができたらどんなに良かったらうに、と私はオリヴィアを哀れむ。
それがマーサ・ハリスとの間で辛うじて出来たらうか。そうだったらどんなにいいかと私は思う。

ここに、明治生まれの詩人・【千家元麿】(1888-1948)の詩集『自分は見た』から一篇の詩を掲
げる。涙と熱き思いを秘め、純真無垢ともいべき詩人の魂は、ごく日常的な市井の暮らしや風物を
素描した。それらの詩から、素朴にして単純ながらも人生への信頼がしみじみと伝わってくる。とりわけ
て幼き我子のいのちの迸(ほとばし)りを捉えた詩は、詩人の溢れる感動そのままに、実に秀逸である。
こんなふうに・・。

初めて子供を

初めて子供を
草原で地の上を下ろして立たした時
子供は下ばかり向いて、
立つたり、しゃがんだりして
一步も動かず
笑って笑って笑ひぬいた、
恐さうに立つては嬉しくなり、そうつとしゃがんで笑ひ
そのをかしかつた事
自分と子供は顔を見合はしては笑つた。
をかきな奴と自分はあたりを見廻して笑ふと
子供はそつとしゃがんで笑ひ
いつまでもいつまでも一つ所で
悠々と立つたりしゃがんだり
小さな身をふるはして
喜んでゐた。

〔『千家元麿詩集』 彌生書房 1964〕

この詩は絶品である。思わず笑いが込み上げ、そしてもう嬉しくて涙が出る。もしも親がこのようにして、子どもと一体になり、子どもそのものになって、子どもの感じるままを一緒に感じる事が出来るならば、その子は生涯＜自分の値打ち＞を疑うことはなかろう。＜何かしら誰かが貰ってくれる、そして誰かにあげられる‘良きもの’が自分には有る＞といったふうに、絶対的な確信を持てるであろうから。‘生の悦び’を分かち合うこと、それで＜親子で良かった！＞と感じられる、その瞬間こそが希望である。この素朴な幸福感こそが得難い。

そう言えば、思い出したことがある。その昔、私たち山上の家族は打ち連れて野山を散策することが好きであった。父親を先頭にいろんなところへ分け入った。そしてたくさんのもを見た。高木のホオノキに繁茂する青々した朴の葉、山葡萄のツルにぶら下がる小粒の可愛らしい群青の葡萄の房…。折々に風呂焚きを使う薪(たきぎ)を拾うこともあり、それらを掻き集めて束に括り、それぞれ背に担いで山道を駆け降りた。そんなわれら家族の勇姿(!)が臉に浮かぶ。春ともなれば陽射しを浴びた土手やら原っぱなどそこかしこにツクシ、わらび、ヨモギが、それに姫竹の子の新芽もニョキニョキ生えていた。母親は郷里が秋田だから、それらを見つけるのに目敏く、率先して娘らを導いた。野蔕(のぶき)などは皮剥きに指先が真っ黒に汚れて結構難儀なのだったが、ちよっぴりほろ苦い春の息吹に染まりながら皆で嬉々として興じた。それら収穫物はよく家族の夕餉の食卓に乗った。大袈裟だけどちよっとした労働をしたことになるわけで、子ども心に自分が何かしら役立った(useful)という感覚は殊更満足なのであった。そんなことがいつしかわたし達三人姉妹の習い性となっていった。記憶にあるのは確か

茨城で霞ヶ浦の辺りに住んでいた頃だったか、田んぼの畦の流れに蜆(しじみ)を見つけたりすると狂喜した。土手沿いの湧き水の水溜りに野芹(セリ)が群生しているのを見つけると心弾ませた。<お母さんに持って帰ってあげよう！>と勇み立つ。その悦ぶ顔が見たかったから・・・母は野辺に咲く花たちを殊の外嬉しがったから、花束にして持って帰ったりもした。藪椿などは勿論のこと・・・<ワアー、綺麗ねえ>と喜ばれると、何だかとても誇らしかったのを覚えている。

このマーサ・ハリスの論文の骨子として語られているのは、「女性性及び母性の基盤となるのは受容的な母親対象 receptive maternal object を内在化する能力である」といったことであり、この点《症例オリビア》が成功例であることに異論は無い。だが、そうした概説よりも、オリビアのキャリアが昇進したとき、今や寡婦となり一人寂しく暮らす母親にその吉報を長距離電話で知らせてやり喜ばせてあげたいと彼女が思ったということ、それから彼女の妊娠で母親にもう一人孫の顔を見せてあげられると幸せ感を覚えたといった、マーサ・ハリスが何気なく語っている、その事実注目したい。‘内在化された対象’とは実際にどのような‘働き’をするものかが問われるはず。ここでオリビアは<お母さんはわたしを喜んでくれる・・・>と素直に感じられているわけで、これこそが肝心要。この彼女の誇らしさが何よりも喜ばしい。まさにそれが彼女の‘自分の値打ち’を裏付けていることになる。であればこそ、間違いなしにこれを成功例と信じられる。

もしも子どもが誰かに(特にお母さんに!)喜んでもらえる、それが自分にも出来たと感じられるとき、それこそがその子の自尊心(self-esteem/値打ち)の中核となろう。だから親に求められているのは、単純にただ子どもを喜んであげる、そうした能力ではなからうかと思われる。このことは精神分析の文献をとおして、案外取り沙汰されていない。何故だろう。むしろ彼らに反撥されそうな気がしてならない、もしくは無視されるか・・・。経験レベルで了解不可能なのかも知れない。どうやら彼らの常識では、単純にただ子どもを喜んであげられる親などいるわけないのだろう。何だか寂しい。(因みに、この「喜んであげる・喜んでもらう」を英訳することは至難といっている。言葉が断然見つからない。おそらくこれって日本語、もしくは日本人に特有な感覚なのだろうか。)

ところがその傍ら、昨今ピオンの「母親の夢想 maternal reverie」が取り沙汰されている。しかしながら、それが事実として母親のどんな‘働き’を意味しているものやら、具体的なところでその詳細な描写など私は皆目知らない。一体彼は何を言っているのやらと誰しも煩悶したろう。さっぱり把握しかねる。ピオンにしてみてもそれこそが彼自らの‘無いものねだり’であったわけで、つまりそれがいかなるものか彼自身にも体験が無い、だからほんとは何も知らないと私は睨んでいる。それも薄々私には解る。お母さんの‘想い’のどこにも自分の居場所がない。その目に自分がどんなふう映っているものやらまるで伝わってこない。子どもの中の<見て！見て！>が空振りしているわけだ。詰まりのところ、<お母さんはボクのこと、ちっとも喜んでくれない・・・>ということに尽きよう。おそらく誰にでも一度や二度はそれで焦れた覚えはあるだろう。あまりにもデリケートだから秘して語らずとも・・・それで彼の地の多くの人々はそれに否応もなしに吸い寄せられた。そして、まるでお念仏みたいにその「夢想 reverie」という

言葉が独り歩きしてゆく。今や分析家・心理臨床家にとっての必須条件みたいに・・・確かに人は< 思うこと・思われること > に生涯飢餓感を抱き続ける、そうした存在なのだから。それに気づいただけでもピオンのお手柄といえよう。それだって、ピオンに限らない。メルツァーだって、マーサ・ハリスだってそうなのだ。その生い立ちを辿れば、彼らはどなたも、「母親の憂い・悲しみ」の表情に殊の外鋭敏な感受性を持った子どもであったものと推察される。そして実は私もまたそうであった。< お母さんの涙を拭き取り、喜ばせてあげたい。お母さんを笑顔にしてやりたい！ >。その願いがあればこそ、精神分析へと導かれた。そこには‘自分の値打ち/self-esteem’を賭した願掛けが秘められていたろう。それぞれがどこまでそれを成就したかは別の話として・・・さて、今こそ「母親の夢想 reverie」の実体を、それが実際にいかなるものか、もっとも語らねばならない、知られねばならない。世界のすみずみからそれらの体験が聞けたらいい。日本人なればこそその何かを世界へ向けて発信できないだろうか。今後日本人が精神分析の分野で貢献できることがあるとしたら、真にこの点であろうかと確信している。そのためにも今こそ我国でも「対人援助のプロフェッショナル」の間でタヴィストック流の《乳幼児観察》が浸透してゆくことが求められる。今後の動静に注目したい。どんな‘発見’があらうかと興味津々である。我ら民族の「日本語」は人間としての最も根源的ないのちに肉薄している。すなわち「想い(情感・情念)」の領域である。その豊かさ・濃さ・深さ、それをもっとも言葉で掬い取ってみたい。そうすることで‘自分の値打ち’が、その男女の性別を問わず、さらには母性そして父性もまた、陶冶されてゆくであろうと期待している。

そこでいつの日にか招来されるであろう、多くの‘発見’に先立ち、今ここにまずはその筆頭として、我が敬愛する明治生まれの女流詩人【永瀬清子】(1906～1995)の詩の一つ挙げたい。個人的なことを述べると、実に彼女は、これからの行く末に逡巡するときに私が教えを請うことのできる先達ともいべき女性の一人であり、その存在は私という「個我」が忘却の淵へと流されないための‘とも綱’を意味している。【永瀬清子】が内なる「近代自我」の目覚めに呻きやら軋みを抱えながら、それでもほっと一瞬弛(ゆる)むときの母としての表情が私にはとても好ましい。我子らを描写した数少ない詩篇のなかの一つがこれ・・・際立って逸品である。

鷹の羽

子供は山で一枚の大きな鳥の羽を拾って来た。
それは美しい不思議なだんだらがあり
あたかも生気にみちた自然からの
飛沫のようにつやつやと光っている。
これはたしかに鷹類の羽にちがいない。

富士の見える松の木の
高い所に棲んでいる。

目玉のギロツとしたあの鳥のものにちがいない。
風と共に空を翔けり
獲物を発見するや忽ち急降下してくる
あの壮んな鳥のものにちがいない。

お母さんは小さい時に読んだ。
金色の羽を拾ったために
数々の冒険に出あう若者の
長い運命的な物語を。
あれは多分スラブの民話だった。
たしかに鷹の羽をみていれば
勇敢で冒険的な、
矢のようにはやる気持が湧いてくる。
子供よ。
お前は珍しいものを拾って来て
うんと元気な子になりそうだ。
お母さんの知らない世界をどンドンゆきそうだ。
お母さんに出来なかつた事を沢山しそうだ。
頬の紅い子よ
我子よ。

[[『永瀬清子詩集』 思潮社 1979]

この詩を初めて目にしたとき、私の胸は躍り、でんぐり返るような嬉しさだった。因みに、私が下線を引いた箇所はまさにピオンの「母親の夢想 reverie」と言ってよかろう。息子から或る日「鷹の羽」一枚を贈られて、母親は心躍らせる。悦びがジワジワと込み上げる。そしてそのメンタル・スペース(想い)の中にしっかりと我子が抱えられる。そこに未来の「生きてゆく我子」に夢を馳せ、いつしかもはや「生きられない私」はそのいのちに引き継がれてゆくことを思う。かくしていのちを産み育てる性としての【永瀬清子】は、その‘いのちの繋がり’を、親子の因縁を不思議と思い、また有難くも思い、心深く揺すぶられている。何といういのちへ信頼、そして誇らしさであることか！この慎ましい悦びこそ、女性というものそして母性なるものの‘値打ち’を根底で支えるものではなからうか。それがまた、ごく自然に「生きてゆく我子」の<己の値打ち(自負心 self-esteem)>をも疑いなく保証してゆくであろうことが知られよう。

ここでふと思う。オリヴィアは、マーサ・ハリスの訃報をどのように迎えただろうかと…。一時は寂寥を覚えたにしても、尚も‘内的対象’としての彼女を胸のうちに活かし続けねばと思ひ至るであろう。すなわち、<マーサ・ハリスに喜んでもらいたい>という思いが彼女を奮い立たせたであろう。その願いに忠実である限り、オリヴィアはもう一回り大きく成長を遂げたに違いなからう。女性としても母親としても…。そして必ずや<自分の値打ち>を掴んだであろう。そう信じたい。 (2016/03/20 記)